

社乃杜

秩父神社社報

柞乃杜(はそのもり)

第 11 号

平成6年12月3日
(大祭)



みほどの
いまだ来まくぬ
遙き女
神ごぶる声や
かぐれの森

新しいマチ文化の原点

平成六年の秋、秩父は又 夜祭を祝います。

秩父は祭の宝庫、夜祭はその結集なのです。

当社は秩父の総鎮守、伝統のマチ文化の原点です。

それだけに当社は 新しいマチ造りの拠点でもあるのです。

マチとは古来マツリの別名、ひとびとが日頃あこがれる賑わい。
だからマツリはムラ（村）のマチ化、日本のコミュニティが
年毎によみがえるイチ（市）の賑わいでした。

古代の祭が「社会」つまり社、という土地神の祭であつたようにも
むかしからコミュニティは マツリの結集を必要とするのです。

現代は地方の時代、コミュニティが新たにマチ文化の力を培う時代
その創造の原点に 当社は変わらずに立ち続ける覚悟です。

解説 秩父神社(11)

備宜 浅見 武史

◆昭和の継承の改修事業

平成三年六月より進めて参りました平成御大典奉祝記念事業の第一期事業、御神門・神楽殿・瑞垣の改修工事も本年十一月、瑞垣の全面改修完成を以ちまして完了致しました。この施設は、昭和三年に昭和天皇御大典を記念し、更に当社が國幣小社に昇格した際、当時の秩父セメント株式会社をはじめ地元企業、団体、氏子崇敬者の奉賛によりまして築造されたもので、実に六十余年後の今日、往時の優美な姿に復すことができました。

◆國幣社列格

昭和三年十一月十日、昭和天皇即位大礼の當日、当社は箱根神社、伊豆山神社と共に当時の縣社より國幣小社に昇格いたしました。昇格実現までには先人達の長く熱い思いの跡が遺されています。

明治政府により明治四年、神社は官幣社(國幣社、別格官幣社、府・縣・鄉社(村國幣社、無格社))等の社格制度が定められ奉幣の基準が明確にされ、当社は明治四年に郷社、六年に縣社の指定となりました。社格昇進の動きは明治二十年頃より始まりました。二十三年の請願書に依れば、

「埼玉縣武藏國秩父郡大宮町大字大宮鎮座延喜式内秩父神社ノ義維新以後縣社ニ列セラルト雖モ他ノ社格ニ比シテ、或ハ其當ヲ得サルモノアランカ、神祝氏子ノ民庶ニ於テ相當ノ社格昇進ノ議ヲ請願シ奉ラサルモノハ、我ガ仕フマツル所、我ガ崇ムル所ノ大神ニ對シ奉リ不敬ノ最モ甚シキモノニシテ今且ツ省悟スル時ハ、慄懾ノ至ニ堪ヘス謹ンテ本社ノ由緒ヲ縷陳シ以テ縣社ヲ進メテ官幣社中ニ列セラレントを請願ス。」

以下祭神、八意思兼神の御事跡と当社の由緒正しきを誌した後、

「古昔ヨリ本社ニ比肩セシ足立郡水川神社ハ官幣大社ニ進ミ尼玉郡金鑓神社ハ同中社、多摩郡府中神社ハ同小社ニ列セラル本社独リ此ノ恩澤ニ漏ルモノハ何ゾヤ、之ヲ地名ニ考フルニ水川ハ古无邪志國大宮郷ニ在リ本社ハ古秩父國大宮郷ニ在リ其対峙セシヤ知ルヘシ、之ヲ國史ニつれないのでありました。」



因みに大宮水川神社は明治四年官幣大社に、金鑓神社は十八年に官幣中社に列格しています。その後大正十二年に、秩父宮家創立と雍仁親王殿下の御親拝を機に再び社格昇進願が出されます。

「(前略) 畏キ哉

今上天皇大正十年第二皇子雍仁親王二命シ給フニ秩父宮ノ御称号ヲ以テセラレ尋テ親王社頭ニ

成ラセラレ神儀ニ謁シ親捧アラセラル惟二ニ、皇室ノ御崇敬更ニ厚キヲ加フルモノ優渥ナル歡慮ト深厚ナル神慮ト顯幽相

連カニ其大位ヲ異ニセシモノハ想フニニ考ルニ本社創建ハ崇神天皇ノ朝ニ在リ金鑓創建ハ景行天皇ノ朝ニ在リ相後ルルコト二百年其歎位ヲ言ハ本社ハ水川ニ等シク金鑓ノ上ニアリ延喜式成ルニ至リ

本郡モト一隅ニ偏在シ始メ國下リテ郡トナリシヨリ中古武藏國益開クルニ及ヒ其交通不便ナルヲ以テ本社モ亦自然隱顯ノ異ルアリシモノカ、然レ共府中官社ハ何ノ神ヲ祀レルヤ本國內ノ明神六所ヲ合祀セリ本社ハ其第四殿金鑓ハ其第五殿ニシテ本社位置ハ水川ノ次、金鑓ノ上ニ在リ、水川金鑓既ニ官社ノ列ニ在リ本ツ社独リ其列外ニ措カルハカラサルニ似タリ、況ニヤ府中官社ハモト國司國內ノ明神巡拜ノ勞ヲ省クヤ為メニ合祀儀置セラレシ中

盛儀ヲ挙シ欣抃クコト能ハズ今コソ奮起シテ御社格御昇進ノ稟申スルノ忽ニベキニアラザルヲ痛感致シ候。(後略)」

先人達の永い願いが昭和三年の國幣社列格に繋がりその熱い嬉びは、御神門、鳥居、瑞垣、神楽殿、石玉垣、神符授与所、狛犬、參道敷石等と昭和三年より十年までの間に次々と諸施設を新築し秩父總鎮守たる御社格にふさわしいものに築き上げてまいりました次第です。



秩父の風土と「夜祭」

宮司 蘭 田 稔

いま全国に知られる「秩父夜祭」を、地元の住民たちは端的に「冬まつり」と言う。

また近郷近在では「妙見まち」、北関東一帯の養蚕農家では「お蚕（カイコ）まつり」、そして東北から関東一円の露店商は「妙見さんの大市（タカマチ）」と呼び慣わしてきた。こうした通称はそれぞれ、この祭がもつ性格をよく表しているが、正式には、いうまでもなく埼玉県秩父地方の総鎮守、秩父神社の年に一度の大祭である。

全国の古いお社は、おおよそ土地の神話的風土をその社地と祭礼とで表現してきているものである。秩父神社もまた関東屈指の古社として、よく秩父盆地の生活風土を昔ながらの神話的世界に包み込んで、今はとかく薄れがちな故郷の風貌をなおも色濃く伝えている。

秩父夜祭は、こうした故郷の祭礼文化として住民たちのかけがえのない行事であり、また参詣や見物におとづれる多くの客人たちの望郷の心を揺さぶる祭礼であり続いている。

二

現行十二月三日の夜祭をめぐっては、今でも地元に語り伝えられる微笑ましい神話がある。それが語るには、神社にまつる妙見菩薩は女神さま、武甲山に棲む神は男神さまで、互いに相思相愛の仲である。ところが残念なことに、実は武甲山さまの正妻が近くの町内に鎮まるお諏訪さまなので、お二方も毎晩逢瀬を重ねるわけにもゆかず、かろうじて夜祭の晩だけはお諏訪さまの許しを得て、年に一度の逢引きをされるというのである。

この大祭を彩る祭礼行事は、重量感あふれる豪華な笠鉢と屋台とが、勇壮な太鼓囃子のリズムに乗って曳きまわされ、屋台歌舞伎や曳き踊りを上演すること。それに加えて冬の寒空に贅沢なほどの、打ち上げや仕掛けの大花火を競演することで、よく知られる。だが実は、いずれも秩父神社の夜の神幸

祭にともなう「付けまつり」つまり付帶の神賑わい行事として、江戸時代の中期から明治・大正にかけて地元各町が盛んにしたものにほかならない。そして、その核心をなす祭神出御の神事は、はるか古代に発祥した地元風上の神を祭る形式を今に伝える、はなはだ貴重な伝承祭祀なのである。そこで、この伝統文化の継承に意義ありと認められたからこそ、現在は全国に数少ない国の「重要有形・無形民俗文化財」に指定されているのだ。

たとえば、宝永六年（一七〇九）に時の代官へ提出した「秩父領百姓年中業覚」という文書がある。それには当時の年間行事の中に、旧暦正月の二月から二月三日までを「妙見神事」と称し、郡内すべての住民が男女それぞれの仕事や娯楽を控えて物忌み精進につとめている、とある。そしてさらに、十月の二十日から十一月の三日までをも同じく「妙見神事」と言って、同様の物忌み精進をすると報告している。これは、秩父郡中の農家が、総鎮守の春祭である旧暦二月三日の「田植祭」と、冬祭である旧暦十一月三日の「妙見祭」とに際して、それぞれ十数日あいだ身辺を清浄に保つ敬虔な営みにほかならなかつた。しかも注目してよいのは、初夏の四月八日と晚秋の十月上旬には「武甲山祭」という行事があつて、郡内一円の領民が「妙見嶽」とも仰ぐ武甲山に登拝していることである。

途中にある諏訪社に予め神幸祭執行を報告する神事があり、翌三日の晩には、

神幸行列を先導する六台の笠鉢と屋台も、この諏訪社に近い地点を通過するときには勇壮な屋台囃子の鳴りをひそめて静かにする例が守られている。たしかに武甲山は、その山麓に対面して鎮座する秩父神社の、いわば神体山に当たる。盆地の南面を遮って一千米ほどそり立つ山容は、山麓に拡がる秩父市街を見守る巨大な屏風をなすが如くである。そしてこの夜祭には、市街中央の本社から祭神が武甲山に向けて出立され、この山を正面に望んで「お花畠」という名をもつ高台の「お山」神事によって、神体山に還り鎮まるという古代祭祀の様式が、今に潜んでいるのだ。おそらくは後のまもない頃に秩父国造が本社祭神を八意思兼神に定め、やがて中世に妙見菩薩がそれに習合する。そのように本社に常在する祭神が出来、いつしか本社の女神とお山の男神とに分かれたことで、夜祭も男女二神逢瀬の神事となつた。しかし、それでもなお、古代祭祀の原型をとどめる微があつて、それが唯一、神幸行列の先頭を行く大神に巻きつけられた藁造りの龍神に求められる。

三

長さ三間ほどのこの藁の龍神は、先に紹介した旧暦二月三日の春祭、今は毎年四月四日に執行される「御田植祭」に登場する。この祭は、春先に豊作を祈って稲作りの所作を神事とするものだが、その際に市内的一角に鎮座する今宮神社の龍神池から水神を神役たちが迎える行事があつて、そのご神体が、田の水口をかたどる藁の龍神なのである。そしてこの龍神池は、かつて河岸段丘の豊かな湧水を成し、盆地内でいちはやく住民が定着した中村（丹党中央村氏の在所）の水源であり、しかも武甲山からの伏流水とみなされてきた。つまり、そのことは、春を迎える本社の田植神事が水源を通して武甲山の龍神を迎えることを示しており、したがつて秋の収穫を終えての夜祭には、神幸行列の大神に乗ったその龍神を、また武甲山に送り還すことになるのである。

秩父神社がその里宮として対面する武甲山の山腹には、「大蛇窪」という故

地があつて石灰岩の開発が進む今でも、この「お山」に大蛇が棲むという根強い信仰がある。

また明徳二年（一二九一）の開基と伝える地元の大林山広見禪寺の開山縁起には、近くの池に棲む竜神が初代禪師の説法に帰依して荒川の淵に飛び移つたが、この竜神こそ「秩父總鎮守妙見菩薩」にして、それ以来、毎年六月の川瀬祭（現在七月二十四日）がその「妙見淵」で執行され、また二月の「初寅妙見」に住職が神前で「円通懺摩法」を修して祈祷するのが例だ、と説かれている。

結び

地元風土の地主神が竜神であり、土地第一の聖山に棲んで治山水源の「大神」（大国主・大名持の神）であることは全国各地の土地神話も物語つてゐる。秩父神社の現社殿にある有名な「つなぎの龍」の伝説も、夜祭で「お諏訪渡り」する理由も、諏訪神が本来竜神であることを思えば、先史以来の「秩父大神」が「お山」に棲む竜神であることと無縁とは考えられない。こうして見るところ、秩父盆地の中央に鎮座する秩父神社が、なぜこの土地一円の総鎮守なのかが明らかになる。つまりは、盆地全体の聖山・武甲山という「山宮」に鎮まる秩父國魂の「大神」を、春の「田植祭」に本社の「里宮」に歓迎し、やがて農事や養蚕の収穫を終えた晚秋に、この「秩父夜祭」でまた「お山」に鎮送するという、この毎年の送迎神事、すなわち盆地全体の「風土祭祀」を、当社が千古変わらずに執行してきたからこそなのだ。ともあれ、やがて訪れる木枯らしの秩父風も、この夜祭あつてこそ、山びとがそれを凌いできたのである。

観月コンサートを終えて

秩父神社氏子青年会副会長
観月コンサート実行委員長

新井 康夫



神門をくぐると、ススキの匂いに導かれて、篝火の炎と、ほのかに香の漂う中、邦楽界の名手の方々を迎えるにふさわしい月見の宴のはじまりである。

◇

静寂を破って、師弟の奏でる尺八の二重奏の調べは、澄んだ空気を風と押し流し、その満席の会場全体を幽玄の世界へと引き込むのに何秒もからなかった。じっと目を閉じて聴き入ると、繊細な箏と尺八の音色は、生活の中にあって自分に戻れる一瞬の幸せを感じさせてくれる。

お社に鎮まります神々の御心は、奏者の気持ちの高まりと、一心不乱に聴き入る人々の心の感銘と共に共鳴して、一つになり「神人和楽」の瞬間を皆が感じている。
（古典にひたる）
私達の目指している観月コンサートはこれだ、と実感した。快い気持ちは揺れながら、暫しの時が過ぎてゆく。

大きな拍手でハッとして我にかえると、周りの人々の感動が、満足のため息が、皆の心の中に押し寄せてくる。
「大成功だ。」

透きとおった空氣の中、それぞれの心に澄みきった余韻を残して終わりを告げた観月コンサート。秩父の色合いにぴったりの音色との出会いに幸せを覚えると同時に、素晴らしい演奏をご披露下さった山本邦山先生をはじめ演奏の方々、またこの計画に惜しみなくご尽力を頑張ったスタッフの方々、またそれに応えて下さった会場の皆様方に、次回へ向けての気持ちの高まりを決意して、御礼のことばと、感謝を申し上げます。



【演奏者紹介】

◆氏子青年会活動報告



八邦山



十七絃 知砂・崎

尺八 田辺 利山
吉住和子

山本邦山氏

昭和十二年滋賀県大津市に生まれ、

初代山本邦山・中西蝶山師に師事し、

京都外国语大学を卒業後、正統音楽院樂理科を卒業。国内外での公演も

多数あり。

昭和四十九年度芸術選奨文部大臣賞・六十一年度文化庁芸術作品賞受賞ほか功労賞・芸術祭優秀賞など各賞を受賞される。

テレビ、映画音楽界においても活躍され、現在都山流常務理事、東京芸術大学講師、日本三曲協会理事、現代邦楽作曲家連盟事務局長としてご活躍されている。

当社社務所までお越し下さい。

◆氏子青年会々員募集

当社氏子青年会では、引続き会員を募集しております。各種勉強会及びレクリエーションを通じて、会員相互の親睦を深めています。秩父市内に在住、若しくは主な勤務先を有する、五十歳以下の青年男女の方。

当社社務所までお越し下さい。

自 平成六年七月
至 平成六年十一月

七月

夏祭り助勤奉仕

勉強会「夏祭り四方山話」

八月

寄居水天宮祭視察

武甲山ハイキング

十月

観月コンサート

『山本邦山を迎えて』

総勢三百五十名

十一月

勉強会「夜祭り雑談」

境内清掃奉仕

※各種恒例祭、助勤奉仕

ふくろう
梟だより



献幣のことば

平成五年献幣使

久下神社宮司 栗原行平

先般心明き日本の民のひとりとして、第六十一回伊勢神宮式年遷宮遷御の儀に特別奉拝を許されました。その感慨は次のように凝縮されております。

時はしも平成の秋 石上古き神業

今ぞまた蘇りゆく 銀垣は徐徐進み

淨闇に鶴鳴あれば 皇神の光新なし

偲ばばや淨火のもと

遠つ代や 天武持統の熱き意を

畏しや神遷ります礼式を常闇のなか

仰ぎ拝む

奉幣秩父妙見社

獻幣使 栗原行平

仰觀秩父碧空涯

恐懼奉書高殿階

靈氣滿城深杜肅

謹思神德戴恩頼

栗原行平氏

熊谷市久下神社宮司

埼玉県神社庁理事

全日本弓道連盟 五段練士

の民として、ここ秩父の神域に額づき、神社本庁統理の命により本序幣を奉る榮を与えられたことは無上の光栄であります。

私事で恐縮ですが、私は幼少の頃より、荒川の中つ瀬のほとりに育ち、日々紫煙る秩父嶺を仰いで過ごしました。後、熊谷中学校に進学すると、毎年度初めの学校行事の剛健行軍で当社を目標とし、ひたすら力走したものでした。戦後は、埼玉駅伝の出発点がこの地でありましたので、社頭に頭を垂れ必勝を祈念し選手を激励し善戦したことも忘れられません。

その後、国民体育大会や高校総合体育大会弓道競技の監督として、再三に

わたり秩父で強化合宿を実施し、その都度神前に武運を祈願したものであります。お陰で重ねて中原に観を為すことを得ました。

そのように、生涯に亘って縁の深いこの神座大前に進み祭詞を奏したことは望外の思いであります。

近年、神社界では、教化活動の重要性が喧伝されていますが、私は方法論に流れがちな教化に警鐘を叩き、むしろ神人合一の境地たる祭りを体験することを基本に据えたいと考えております。

その意味で、式年遷宮に続くこの大祭奉仕の熱き思いを私せず、奉仕神社の社頭にて、また埼玉県神社庁理事としての活動のなかで高め広める所存であります。

表紙の短歌は、早稲田大学名誉教授・文学博士 植田重雄氏が春日大社ご参拝の折に詠まれた数首のうち一首を特に戴いたものです。

植田先生は、学会の重鎮で当社宮司がかねて戴いたものです。

「千年の森」シンポジウムにも出演していただきました。大正十一年、静岡県

にてご出生。早大で宗教学の研究と教

◆秩父妙見講

自 平成六年 九月

至 平成六年十一月

九月十五日川口三栄講

金子秀行講元外二十六名

九月十七日荒川妙見講

新井文久造講元外百二十名

九月二十五日上町講

新井清講元外二百五十九名

十月二日上宮地講

斎藤愛治講元外百八十六名

十月十九日東町講

岩田共司講元外百三十名

十一月十二日番場講

前堅福次郎講元外百三十一名

◆職員辞令

実習生 甲田豊治、権柄宜を命ず。

(十月一日付)

【表紙和歌説明】

みほとけの いまだ来まさぬ 遠き世の
神さぶる声や こがらしの森



日本棋院開幕五段

お願い致します。

◆古札焼納について

本年も大晦日夕刻より古札焼納祭を執り行います。一年間神棚にお祭り頂きました神札等をお納め下さい。

尚、達磨の焼納はご遠慮頂きますようお願い致します。

表紙について



また、当社社殿彫刻より「左甚五郎作つなぎの龍」を描いた絵は、同六年生の前堅俊史君の作品です。御本殿東北隅をお守りし、特殊な伝承を伝える青い龍の姿が、緑青の吹いた屋根の忠実な描写と共に、に臨場感と奥行きを感じさせる作品かと思います。

今回、早く絵画をお貸し戴きました第一小学校の関係者の皆様に厚く御礼申し上げますと共に、作品を描かれた児童の皆様には、愈々元気で勉学に励まされますようお祈り申し上げております。



今回の表紙及び裏表紙に掲載を致しました絵画は、去る十一月五日・六日、秋父第一小学校において校内展示された、「郷土を描く児童生徒美術展」に出品された作品より選ばせて戴きました。

例年、秋に郷土を愛する心を深め育むことを目的に回を重ね、本年が第二十九回目の美術展となつたとのことです。

表紙に掲載致しました当社社殿正面の絵は、同小学校六年生の木暮正樹君の描いた作品です。社殿彫刻の艶やかな色彩とコントラストをなす御神苑の緑が一際鮮やかに描かれて、清々しく伸びやかな印象を持ちました。

裏表紙に掲載致しました、市内下宮地町に鎮座する大林山広見神寺を描いた絵は、同小学校五年生の江沢聰哉君の作品です。広見寺は当社と特別の縁もあり、掲載をさせて戴きました。色彩感覚豊かな、絵心を感じさせる作品と宮司以下職員一同感銘致しました。

■ 神々の多くの恵みを頂き、例年にも増して豊かな稔りの秋を迎えたことに感謝申し上げ、氏子崇敬者皆様方と共に例大祭を祝し、ここに社報『作乃杜』第一号を掲げます。

■本年は三日四日が土曜日・日曜日に重なり、約三十万の人口が予想されています。国民の総サラリーマン化の傾向は、今日の時間短縮の世相ともあいまって、各種行事を祝祭日に集中させる傾向があるようです。

多くの日本人が農業を中心的に生計を

立っていた時代、祭日は即農閑期であつて、村人総出の手作りのお祭りが全国各地で行わされて参りました。

諸々の取り組みがなされていますが、その中で祭日の議論が交わされることも少なくないことでしよう。そもそも祭りとは何であったのか。その日取りにはどのような意味があつたのか。日まぐるしく変化を遂げる現代にあって、その地域の歴史を辿り、現代的な意味付けが行われることについて、祭りの眞の価値が問われているよう思います。

平成六年（一九九四）十二月三日
編集行秋父神社社務所
〒八埼玉県秩父市番場町一一一
TEL（0490）二三二一〇二六二二
FAX（0490）二三四一五五九六
印刷所 有隣会社 拡文社印刷所
〒三六秩父市東町二七一八

秩父神社御大典奉祝事業

奉賛者御芳名(5)

自 平成六年六月末日 至 平成六年十一月十五日現在
(敬称略・順不同・但し金一円以上奉納者)

日野田地区

金五万円
荒木 正行

近戸地区

金三十万円
若林 一郎

山中地区

金百万円
崇成道会教団
代表 高山粹啓

上町地区

金一円
茂木卯三郎

中宮地地区

金五万円
雨宮 達也

上黒谷地区

金三万円
斎藤 達美

中町地区

金三万円
鈴木 善次郎

野坂地区

金三万円
柴崎 武男

下黒谷地区

金三万円
千葉 茂

神社扱奉納金

金二万円
酒井 昭三

山崎地区

金二万円
本橋 雄治

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金二万円
山中 敬二

山崎地区

金二万円
竹村 勝洋

山崎地区

金二万円
笠原 雄策

山崎地区

金二万円
酒井 良策

山崎地区

金二万円
市川 敏治

山崎地区

金二万円
大谷 清一

山崎地区

金

◆秩父市各地区奉賛奉納額

■銅板基金

金二円
清水 せい
加藤 泰弘

野口 布施 恒一
内田 順子 小室 善衛
柏木 良治 福島 三千人
田島 幸一 鈴木 中島
富田為三郎 吉井 利子
高士 夕美 柴崎セツ子
中臺 利雄 森本きみ子
川内 野口 マツ
大庭 トマ子 田中 田中
嶋田 田中 谷耕

※ご芳名並びに奉賛金につきましては、誤記のないように注意をしておりますが誤りがございましたときは、ご連絡、ご指導、頂きますようお願い申し上げま



〒三六八
連絡先
秩父市番場町一ノ一
秩父神社社務所
TEL(0495)22-0262
FAX(0495)24-五五九六